

機関番号：35309

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530607

研究課題名 (和文) 加齢および高齢者に関する知識とイメージを測定するテストの開発

研究課題名 (英文) Development of a test to measure knowledge and image on aging and elderly people

研究代表者

奥村 由美子 (OKUMURA YUMIKO)

川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授

研究者番号：70412252

研究成果の概要 (和文)：

本研究の目的は、加齢および高齢者に関する知識とイメージを測定するテストを開発することである。そのための基礎研究として、大学生の「認知症高齢者」、「健常高齢者」、「高齢者」のイメージ、加齢や認知症についての知識などを調べた。発達過程において高齢者とのかかわり経験がある場合、親や祖父母の高齢者への態度に思いやりを感じている場合に様々な状態にある高齢者に肯定的イメージを持つことがわかった。調査結果をふまえて、加齢および高齢者に関する知識とイメージを測定する調査項目を精査した。また、老人心理学の受講によって高齢者イメージが変化する可能性も認められた。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this study was to develop a test to measure knowledge and image on aging and elderly people. Images of “the elderly with dementia”, “the healthy elderly”, “the elderly”, and knowledge about aging and dementia of university students were investigated. Students, in case of having good experiences with the elderly or having good feelings in attitudes of parents or grand parents to other elderly in developmental process, had affirmative images to the elderly. On the basis of findings, the investigation items of knowledge and images about aging and the elderly were refined to be able to measure the contents properly and simply. In addition, the possibility, that student’s image of the elderly were changed affirmatively through lecture of Aging psychology, were shown.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	100,000	30,000	130,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：加齢 高齢者 イメージ 認知症 生涯発達

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 高齢社会を迎え、様々な年齢の人々が

社会で共存する状況となり、高齢者へ理解を深める必要性がより一層高まってきた。ある年齢の人々が自己とは異なる年代の人々に抱くイメージは、彼らの行動に影響を与えると同時に、行動の結果によってイメージが修正されると考えられる。高齢者にかかわる専門職を目指す者、あるいは、既に就いている者が自己の高齢者イメージについて知ることは重要であり、近年では、看護師や介護福祉士といった高齢者にかかわる専門職を養成における高齢者イメージの研究が散見されるようになってきている。

(2) 学校教育の現場でも、教育の一環としての活動や学生自身の自発的な（ボランティア）活動などを通して高齢者施設で生活する高齢者と接する機会が増えているが、在宅高齢者と施設入所高齢者ではそのイメージは異なる。一般に、施設入所高齢者は在宅高齢者と比べて「虚弱」な場合が多く、また、認知症などの健常高齢者と異なる様子を呈する高齢者については、その高齢者や疾患への理解の不十分さから、不適切に否定的なイメージと結びつけることも多い。

(3) 核家族という生活形態で成長期を過ごし高齢者とのかかわりを以前ほどもたない中で、若い世代が高齢者に対して親しみを感じる機会も少なくなっているともいえる。少子高齢化といわれる現在、自ら社会を支える一員であるという自覚をもち、介護保険や年金問題など様々な角度から社会のあり方を考えていけるようにするためにも、若い世代が加齢に関する正しい知識を持つことは重要な課題である。

## 2. 研究の目的

(1) 高齢者に対するイメージ（老人観）については数多くの研究がなされており、例えば保坂ら<sup>1)</sup>や久世<sup>2)</sup>によれば、学生の高齢者イ

メージは、高齢者との同居経験の有無よりも高齢者とのかかわりの有無との関連がみられたとされている。

また、近年増加している認知症高齢者への介護には、様々な専門職がより質の高い介護を目指して日々取り組んでいるが、それにかかわる専門職の認知症高齢者に対するイメージの違いが、介護・介入の姿勢などに影響を及ぼす可能性がある。高齢者にかかわる者にとって、加齢や疾患についての正しい知識や肯定的イメージをもつことが必要であり、その測定（確認）および教育は、検討すべき重要な課題である。

(2) 加齢および高齢者に関する知識を身につける、あるいは知識とイメージを測定するテストとしては、パルモアによる Facts on Aging Quiz (FAQ, 1980, 1988 に改訂)<sup>3-5)</sup>がある。クイズ形式で様々な場面で気軽に導入できるものであるが、作成年が古く、今の日本の実情に合わない質問項目が増えている。

本研究では、今の日本の実情に合い、高齢者にかかわる専門職だけでなく、学校教育や地域支援活動など様々な場面で使える、加齢および高齢者に関する知識とイメージを簡便に測定できるテストを作成すること、実際に作成したテストを用いて、加齢や高齢者に関して教えるための教材についても考えることを目的とする。

## 文献

1) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生のイメージ - SD 法による分析 - . 社会老年学 27, 22-33, 1988.

2) 久世淳子: 青年(学生)の高齢者イメージに関する一考察. 日本福祉大学情報社会科学論集, 第1巻, p. 9-12, 1997.

3) Palmore E. Facts on aging; A short quiz. Gerontologist, 17:315-320, 1977.

4) Palmore E. The facts on aging quiz: a review of findings. *Gerontologist*, 20:669-672, 1980.

5) Palmore E. Response to "The factor structure of the Facts on Aging Quiz". *Gerontologist*, 28:125-126, 1988.

### 3. 研究の方法

(1) 加齢および高齢者に関する知識とイメージを測定するテストを開発するための基礎となる、高齢者イメージに関する文献調査を行なった。

(2) 文献調査の結果から「認知症高齢者」と「健常高齢者」のイメージ、高齢者とのかわり経験、加齢および認知症に関する知識などについての質問紙を作成した。また、大学生を対象とした調査を行ない、「認知症高齢者」と「健常高齢者」それぞれのイメージと、それに関連する要因を検討した。

(3) より一般的な加齢や高齢者に関する知識、およびイメージの測定方法を検討するために、大学生を対象に、「認知症高齢者」「健常高齢者」にかえて、「高齢者」イメージ、高齢者とのかわり経験、加齢および認知症に関する知識などについて調査した。そして、「高齢者」イメージと、それに関連する要因を検討した。

(4) 質問紙の「高齢者」イメージ、加齢および認知症の知識についての調査項目を改訂した。

(5) 改訂した質問紙を用いて、大学の老人心理学受講前後に調査を行なった。老人心理学を受講することによるイメージや知識の変化、および関連要因を調べ、老人心理学講義がもたらす影響を検討した。

### 4. 研究成果

(1) 今の日本の実情に合う、学校教育や高齢者への専門的支援、地域での支援活動など

様々な場面で使える、加齢および高齢者に関する知識とイメージを測定するテストを開発するための基礎的な研究を行なった。すなわち、テスト開発の基礎となる高齢者イメージに関する文献調査と、大学生を対象とした認知症高齢者と健常高齢者のイメージ、認知症に関する知識などについての質問紙調査である。文献調査では先行研究における質問項目や高齢者イメージに関連する要因を検討し、①高齢者イメージは主に Semantic Differential 法により測定され、用いる形容詞対によりイメージの知見は異なること、②青年期以前の高齢者イメージは比較的肯定的で、その形成には高齢者と交流する頻度や関係性、高齢者への理解度などが関連していること、③イメージは青年期には否定的な方向に変化し、その後はおおむね維持される傾向があることがわかった。

(2) 質問紙調査では認知症高齢者と健常高齢者のイメージとそれらに関連する要因を調べ、①高齢者へのイメージには、発達過程における高齢者との単なる同居経験よりは高齢者とのかわり体験や高齢者への肯定的感情、親や祖父母の態度に対する評価が影響する可能性があること、②イメージは認知症高齢者よりも健常高齢者に対する方が肯定的であること、③認知症高齢者のイメージは認知症の知識の程度による違いはみられなかったが認知症の認識として尋ねた項目については知識の程度によって回答が異なることがわかった。これらの結果は、認知症を含む、加齢や高齢者に関する知識を測定するテスト作成のためのヒントになると考えられた。

(3) (2) の調査結果の分析をさらにすすめ、①大学生が高齢者にもつイメージは対象となる大学生により違いがあること、②大学生の発達過程での祖父母や高齢者とのかわ

り方にそれほどの違いがない場合には、祖母への肯定的感情や親の祖父母への態度、高齢者全般とのかかわりとの関連は、認知症高齢者と健常高齢者のいずれのイメージにも関連する可能性があることがわかった。さらに、より一般的な、加齢や高齢者に関する知識、およびイメージの測定方法の検討につなげるために、認知症高齢者と健常高齢者のイメージの測定にかえて、新たに高齢者のイメージを調査し、イメージ、加齢、認知症に関する項目の改訂のための検討を行なった。

認知症に関する知識の項目は、①正答率が高いこと、②得点の高さと認知症高齢者イメージとの間に関連が見られないこと、などから改訂の必要性があると考えられ、項目の改訂を試みた。もっとも正答率が高い項目についてはこれまでと同じ項目で、新しく加えた遺伝に関する項目の正答率をもっとも低く、改訂を加えた2項目では正答率が上がったものと下がったものに分かれた。改訂しなかった項目についてはほとんど正答率に違いが見られなかった。この項目改訂により、「認知症の認識」については関連が見られる項目が2項目から7項目に、「認知症高齢者イメージ」については0から2項目に増加し、認知症高齢者に対するイメージとより関連する、認知症に関する知識をたずねる項目になったと考えられた。

(4) 高齢者イメージは高齢者に関する知識の影響を受けるため、これまで Facts on Aging Quiz (FAQ)に手を加えた加齢および高齢者についての知識を測定する項目を検討しているが、より手軽に使用するために25項目からなるFAQの項目数を減らす必要がある。そこで、(2)で実施した「健常高齢者」と「高齢者」についての調査結果を用いて、項目の改訂を試みた。まず、高齢者に関する知識を測定する項目については、25項目を

15項目にした。あわせて他の項目についても改訂を行い、認知症に関する知識を問う項目は8項目を7項目にした。さらに、イメージを測定する項目については、高齢者イメージを測定する項目は50対の形容詞対を12項目にしぼり、認知症高齢者のイメージ、認知症の認識はいずれも9項目のままとした。改訂項目により高齢者および認知症に関する知識と高齢者イメージの関係を調べたところ、高齢者および認知症に関する知識はいずれも得点の高低によって円熟性因子得点に差がみられた。また、老人心理学の受講によって、じっくりと高齢者に関心を向けることにより理解が深まるような側面に関連する高齢者イメージが肯定的に変化する可能性が示された。とくに、高齢者とかかわる機会をあまり持っていない、祖父母以外の高齢者に対する親の態度に思いやりを感じていない、高齢者に肯定的な感情をもっていないという場合に、老人心理学の講義を通して高齢者イメージが肯定的に変化する可能性のあることが示された。これらの結果は、さらなる調査項目の吟味や講義内容の検討のための材料となると考えられた。

(5) 知識を測定する項目の改訂を行った上で、老人心理学の講義前後に調査を行い、講義受講による高齢者イメージの変化とその関連要因を検討した。その結果、受講後には、高齢者の「統合・柔軟性」因子と「円熟性」因子について肯定的な変化が認められた。高齢者とかかわりとの関連を検討したところ、「統合・柔軟性」因子では高齢者のことが好きではない場合にイメージが肯定的に変化していた。「積極性」因子では、近隣高齢者とかかわりがそれほどない、親の祖父母以外の高齢者に対する態度に思いやりを感じていない、高齢者との活動をあまり経験していない、高齢者のことが好きではない、とい

う場合にイメージが肯定的に変化していた。

これらのことから、これまでに高齢者との  
かかわりがあまりない、あるいは肯定的感情  
をあまり抱いてこなかったなどの場合には、  
高齢者の心理的特性を知ることができる老  
人心理学の講義を通して高齢者イメージが  
肯定的に変化する可能性が示され、さらなる  
調査項目の吟味や講義内容の検討の材料と  
なると考えられた。

本研究において、加齢および高齢者に関す  
る知識とイメージを測定するテストについ  
てはおおむね作成できた。

老人心理学講義の受講によって、調査対象  
が異なっても同様の結果が示されるのかど  
うか、老人心理学講義そのものが高齢者イメ  
ージに与えるかどうかを明確にするための  
検討を続けている。その結果を考慮して、加  
齢や高齢者に関して教えるための教材につ  
いて検討を進める予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 奥村由美子、久世淳子、大学生の高齢者  
イメージに関連する要因－認知症高齢者  
と健常高齢者のイメージの比較－、日本  
福祉大学健康科学論集、査読無、12巻、  
2009、31-38
- ② 奥村由美子、久世淳子、高齢者のイメ  
ージに関する文献研究－一般高齢者と認知  
症高齢者に対するイメージ－、日本福祉  
大学情報社会科学論集、査読無、11巻、  
2008、57-64
- ③ 久世淳子、奥村由美子、学生の認知症に  
関する知識、日本福祉大学情報社会科学  
論集、査読無、11巻、2008、65-69

〔学会発表〕(計10件)

- ① Okumura Yumiko, Kuze Junko, Factors  
related to the student's image of

elderly people, XXIX International  
Congress of Psychology, 2008.7.25,  
Berlin

- ② Kuze Junko, Okumura Yumiko, Knowledge  
of dementia and the image of elderly  
people, XXIX International Congress  
of Psychology, 2008.7.25, Berlin

〔図書〕(計1件)

- ① 奥村由美子、風間書房、認知症高齢者へ  
の回想法に関する研究－方法と効果－、  
2010、134

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

奥村 由美子 (OKUMURA YUMIKO)  
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授  
研究者番号：70412252

### (2) 研究分担者

久世 淳子 (KUZE JUNKO)  
日本福祉大学・健康科学部・教授  
研究者番号：50221221